

## 東日本大震災被災地 岩手県大槌町における 保健師ボランティア活動報告

川崎 涼子<sup>1</sup>・河村 靖子<sup>1</sup>・黒田 裕美<sup>1</sup>・森藤香奈子<sup>1</sup>

保健学研究 25(1): 53-58, 2013

(2012年10月30日受付)  
(2013年1月8日受理)

### I. はじめに

東日本大震災発生翌月の平成23年4月中旬、一般社団法人全国保健師教育機関協議会（以下、全保協）を通じて、岩手県上閉伊郡大槌町での全戸訪問調査に協力する保健師ボランティア募集が行われた。避難所を含む全戸家庭訪問による大槌町住民の生活・健康調査は、災害後の住民の生活支援であると同時に大槌町の復興計画を推進するための最初の活動であった<sup>1)</sup>。長崎大学医学部保健学科は全保協会員校であり、看護学専攻から保健師資格を有する4名の教員が参加した。数日間という短い期間ではあったが、保健師ボランティアとして過ごした大槌町での活動について報告する。

### II. 事前準備

平成23年4月18日（震災後47日目）、全保協会員校メーリングリストにて、本調査への保健師ボランティア募集が知らされた。この情報は直ちに看護学専攻内メーリングリストでも各教員に知らされ、日程等調整可能な4名が参加希望した（3名が4月26-27日、1名が5月3-5日に参加）。ボランティアへの参加に当たり、まずは長崎から大槌町へのアクセスが可能であるかを確認する必要がある。震災から1ヵ月余りが経過していたが、被災地への交通機関は限られていた。この時

期、東北新幹線の運転は東京 - 福島間までであり（全線再開は4月29日であった）、岩手県内沿岸地域の路線も復旧のめどは立っていなかった。先行する3名は、安全かつ効率的な経路として東京から夜行バスで岩手県釜石駅へ向かい、釜石駅から大槌町の調査拠点には現地タクシーを利用する経路を確認し、出発した。

大槌町での宿泊や上下水道等の状況や現地の状況、方言に関する予備知識、調査参加する際の注意点や心構えについて、全保協からは事前にメールで写真を付して詳細にボランティア参加者に送られており、筆者らは寝袋、食料、防寒具等必要最低限の準備を速やかに行うことができた。先行した3名の移動スケジュールを表1に示す。

### III. 大槌町の被災状況

大槌町は、岩手県沿岸の中央部に位置している。西に北上山地を頂き、海岸に向かい大槌川、小槌川の2本の川が流れている。三陸リアス式海岸が特徴的な沿岸部に市街地、役場等の行政機関があった。平成22年国勢調査では総人口15,276人であり、65歳以上人口4,948人（高齢化率32.4%）である。人口減少傾向にあり、過疎地域に指定されていた。

東日本大震災の津波と火災により、被害を受けた沿岸

表1. 移動スケジュール

日程	交通機関	
4月25日（月）	18:45 長崎空港発 → 20:25 羽田空港着 22:55 JR秋葉原駅発（夜行バス） → 釜石駅	移動 （車中泊）
4月26日（火）	7:30 釜石駅着 8:00 釜石駅発（現地タクシー） → 8:30 大槌町調査拠点・宿泊所	訪問調査活動 （現地宿泊）
4月27日（水）	20:00 大槌町宿泊所 →（現地タクシー）→ 釜石駅 21:40 釜石駅前発（夜行バス） → 池袋駅	訪問調査活動 （車中泊）
4月28日（木）	6:30 池袋駅着 11:10 羽田空港発 → 13:10 長崎空港着	移動

1 長崎大学大学院医歯薬学総合研究科保健学専攻



写真1. 大槌病院（平成23年4月27日撮影）



写真2. 大槌町役場（平成23年4月27日撮影）

地域はほぼ壊滅状態であった。筆者らが訪れた時期は、684人の死者・1,044人の行方不明者が報告されていた（平成23年4月22日17:00時点、岩手県災害対策本部ホームページ発表）。これは大槌町人口の1割を超えており、町職員の2割が含まれていた<sup>1)</sup>。避難所は55カ所、避難者数5,887人であった。多くの町民は津波を逃れた高台の避難所、山間部の親せき宅での避難生活が1か月を超えていた。ライフラインのうち電気はほぼ復旧していたが上下水道の復旧は十分ではなく、自衛隊の仮設入浴施設はフル回転していた。救援や支援物資は多く届いていたが、生活上の様々な問題が生じようとしていた。津波による被災を逃れた山間部も、市街地に近いほど津波後の山火事が激しかったため、赤く焼けた木々が目立っていた。山間部ではシイタケ、葉タバコ等の農家が多く、本調査拠点となった宿泊施設として納屋を提供して頂いたのも、葉タバコ農家のご家族であった。

町職員は役場を被災し、町長をはじめ多くの職員を津波で亡くし、保健師はほとんどすべての住民の保健活動資料を失っていた。住民基本台帳等のデータも失われたため、どこにどのような問題を抱えた住民が何人いるのかを把握するためにも、すべての住民への訪問調査が必

要であった。

#### IV. 大槌町健康状況把握訪問調査について

今回我々が参加した全戸訪問調査は、岩手県大槌町からの依頼を受け、全保協が募集し全国から参加した137人の保健師等によって、平成23年4月23日から5月8日に行われたものの一部である。発起人は元大槌町保健師、現岩手看護短期大学地域看護学専攻の鈴木り子教授であった。鈴木教授は被災直後の支援活動から継続して本調査でも現地指揮をとられていた。本調査の目的は、避難所を含む全戸家庭訪問による大槌町民の安否確認と健康生活調査である。期間中は、調査だけでなく、家庭訪問により把握した支援の必要な者の役場保健師への申し送りと、調査結果からの「岩手県大槌町民の健康状態把握のための訪問調査に基づく提言（第一報）」が行われた<sup>2)</sup>。

訪問調査は、予め準備された健康生活調査票、大槌町福祉課が発行する訪問調査説明書（調査目的、調査期間、調査方法、倫理的配慮等について記載）、町長職務代行者の副町長による身分証明証、地図を持参し、保健師ベスト着用して行った。

調査結果は、その後大槌町から全保協が別途依頼を受け、集計および分析を行い、復興へ向けた報告書として町へ提出された。調査結果からは、住民の高血圧・循環器疾患予防と心のケアの必要性が提言されている。また、この報告書をもとに、町民への結果報告会、町民のアイデア募集と地域の食生活改善推進員が中心となった住民主体で展開する保健活動が企画、実施された。平成24年2月からは、大槌町民主体の高血圧予防のための減塩活動「大槌町塩とりリボンキャンペーン」として、住民とともに実現可能な行動計画が検討されている。以上のプロジェクトは、平成23年度厚生労働省老人保健事業推進費等補助金「地震による津波で被災した一人暮らし高齢者・高齢者世帯の生活再構築のための支援過程の構造化」事業として実施、報告されている<sup>2)</sup>。



写真3. 海岸堤防と地盤沈下（平成23年4月27日撮影）



## V. 訪問調査の実際

4月25日出発の3名は、夜行バスで早朝の釜石駅に到着後すぐに現地タクシーで調査拠点となる大槌町の葉タバコ農家へ向かった。調査に参加するボランティアは、ここで鈴木教授と待ち合わせをすることになっていた。タクシーは震災6日前の3月5日に開通したばかりの釜石山田道路を通ったが、タクシーの運転手は、「海沿いの道路が通行止めになりこの新道路がなければ救急車両も大型車両も大槌町に入ることができなかっただろう」と話した。車中から見た大槌町の風景は、1ヵ月余りが経過しても津波の凄まじさを伝えた。堤防を越える高さの津波という報道も、高さ約6mの堤防を間近に見て改めて分かる威力であった。鈴木教授の運転する自家用車で調査拠点である農家の納屋に到着後、すぐに訪問調査の説明を受けた。訪問調査は山間部の集落から川沿いに始められており、筆者らは、1日目は3人一組で10戸程の集落を、2日目は30戸以上の集落を担当した。前述の調査関連書類の他、背中に「保健師」と書かれた黄色いベストを着用し、血圧計、体温計、聴診器、昼食、飲み物を持って担当地区の家庭訪問を開始した。また、診察可能な診療所、歯科診療所、救急連絡先、包括支援センター保健師、こころの相談窓口等の最新情報と連絡先、交通手段として送迎バスの巡回状況といった情報を共有した。

大槌町内でも山間部では地震や津波による建物の被害はほとんど見られず、満開間近の桜がのどかな景観のなかでの訪問であったが、保健師として各家庭を訪問すると、多くの生活や健康上の問題が生じていることが分かった。以下に筆者らが経験した住民の特徴的な問題をあげる。

### 1. 共同生活世帯の多さ

1軒に複数の世帯が避難し共同で生活している家が珍しくなく、世帯調査の側面を持つ本調査では、1軒の訪問で複数世帯の健康生活調査を行うことも多かった。沿岸地域に住み自宅を流された人々が、山間部の親類や知人の家に避難していたためであるが、住民基本台帳が失われた状況では、旧住所と現在の所在地や連絡先を確認し、世帯中での死亡者・行方不明者を確認しながら家族の健康状態、子どもの通学状況、高齢者や障がい者のサポート状況、被災後の心理的状态などを聞き取っていく必要があった。そのため、質問用紙は常に多く用意し、記載し、調査後には改めて住民基本台帳データや行方不明者情報との照合を行い、いずれの情報も更新していく必要があった。

また、共同生活が1ヵ月を経過すると、大勢の家事を担って奮闘していた母や娘といった女性たちには疲れが見え始めていた。

### 2. もともと持っていた脆弱性による健康状態の悪化

震災前からの心身の脆弱性が、震災後の生活状況の変

化によって悪化したケースがみられた。アルコール依存症の既往を持つ人が、震災後職を失い自宅にこもりがちになり毎晩のようにアルコールを飲んでいたり、震災前には自力歩行が可能であった独居女性が、自宅内でいざり移動しなければならなくなっていたといったケースである。また、高血圧薬等の常備薬を「次はいつもらえるか分からない」と回数を減らし不安を抱きながら内服していた高齢者もいた。これらの人々は、サポートがなければ状況がさらに悪化する可能性の高い人々である。また、訪問や問診によってこそ状況が把握されるが、自らサポートには繋がりにくい人々でもある。本来であれば自立して生活していけるはずの人々が、震災の直接的な原因からでなくその後の生活状況の変化によって心身の健康状態が悪化していることが分かった。

このような特徴の他にも、訪問時本人の拒否がない限りは血圧測定を行っていたが、「特に高血圧を指摘されたことがない」という人の血圧の高さに驚くことが多かった。避難所以外の自宅や親類宅に避難している人々のなかには、今回の訪問調査で「震災後初めて血圧を測ってもらった」という人もおり、被災地では避難所や自宅待機者に限らず、循環器疾患の既往歴がなくても血圧が上昇する傾向にあることを感じた。

これらの訪問によって得られた情報は、住民基本台帳、行方不明者リスト、訪問調査済み地図等の確認・作成とともに、支援が必要な町民はリストに挙げ、場合によっては電話等で保健福祉担当者に連絡するといった対応がとられた。情報の整理は深夜まで続き、その後翌日の訪問地区の地図・世帯情報を準備する作業が行われた。訪問調査期間の後半には、青年団や自治会等へフォーカスグループインタビューが実施され、個別訪問調査結果と合わせて地区診断が行われた。5月8日には、震災後の町民人口ピラミッドとともに、「岩手県大槌町民の健康状況把握のための訪問調査に基づく提言（第一報）」が町へ提出された<sup>1)</sup>。

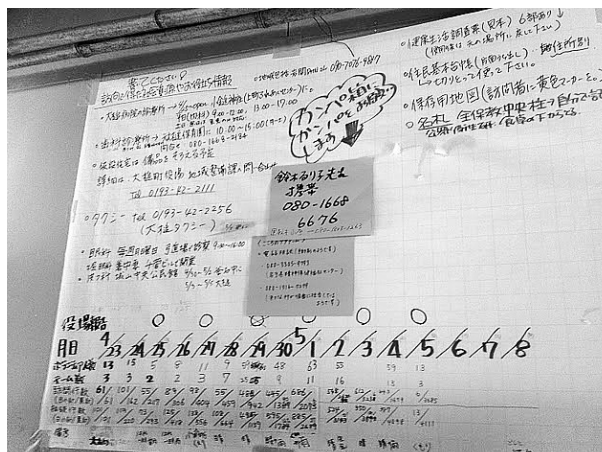


写真4. 調査本部でもある宿泊所内の連絡版

(平成23年5月5日撮影)

## VI. 訪問調査に参加して

今回ボランティアとして参加した期間は、災害発生後2ヵ月未満で、復旧期にあたる。この時期の支援の特徴としては、復旧作業とともに変化する保健ニーズの把握と対応、環境変化によるダメージの予測および被災者の健康状態の把握と対応、高齢者、独居者、障がい者などへの見守り・安否確認等が挙げられる<sup>3)</sup>。大槌町もまさに崩壊しかかった保健医療福祉システムのなかで、避難所から自宅に戻る住民が増え、支援を必要とする人々が集合から点在する個へと移り変わる時期であった。訪問調査を行って改めて分かったのは、自宅で暮らす人々には情報が届きにくく、また、支援者が個別の状況を把握することも困難だということであった。だからこそ、今回の全戸家庭訪問調査は住民のニーズを把握する好機になったと同時に、サービスに繋がりにくい人々への支援そのものとなった。しかし、このような調査は自立して活動できる多くの人員と、設備や物品、時間を必要とする。今回のような調査がすべての被災地で展開できた訳ではなく、今後、復旧期の支援のあり方の一つとして提示される必要があるだろう。

ライフラインや行政機関、保健医療福祉システムが壊滅的な状況に陥った今回のような災害では、多様な支援者・団体が集まる中で町全体の情報を把握し集約することは難しかった。大槌町は被災以前から高齢化・人口減少の進む地域であったが、古くからのコミュニティの連帯が強く、「誰がどこに住み、何が必要か、何を知っているのか、何ができるのか」を住民同士が理解していたため情報伝達・集約の助けとなった。行政や保健医療福祉関係者も被災者であり、支援する側とされる側が互いに緊密なコミュニティネットワークの中で暮らす住民であったことが、支援の遅れや見逃しを補っていたのだと思われる。大槌町でみた、傷ついた住民同士の支えあいや、自治会等の堅固な地区組織による地域性は、災害対策としての地域づくりに重要であると改めて感じた。

参加にあたり、筆者らは住民にどのように受け入れてもらえるだろうかと緊張していた部分もあったが、“保



写真5. 訪問時に着用したベスト（平成23年4月26日撮影）

健師”ベストを着用し「保健師として伺いました」と言うと、大槌町の誰もが訪問を受け入れ、道を歩いても「保健師さんお疲れ様です」と声をかけてくださった。国内・国外の様々な支援を受け入れ、感謝を示す住民の地域性が認められたと同時に、震災前からの大槌町の保健師による保健活動が根付いていることを強く感じた。参加した他の経験豊かな保健師との交流を含め、筆者らにとって学びの多い経験となった。尚、今回の保健師ボランティアにおける活動の一部は、学生や教員を対象として報告が行われた。（表2）

今回の大槌町全戸訪問調査に保健師ボランティアとして参加し、最も印象に残ったのは津波被災跡の凄まじさと、住民生活のギャップである。津波による被害は住居だけでなくインフラ設備や行政機能を奪い、瓦礫のみを残した。その瓦礫は津波後の火災で真っ黒に焼け、町は潮の匂いと瓦礫の匂いに覆われていた。一方で東北の遅い春を迎え、桜が咲く穏やかな季節であった。人々の生活も同様に、避難所でも自宅でも緊急性のある時期は過ぎていたが、潜在的あるいは顕在していても支援が届きにくい心身の健康問題を抱えていた。震災から2年近くが経過し、被災した町民がそれぞれのもとの生活に少しでも近づけていることを願う。

表2. 活動報告一覧

報告	日時	場所	対象	報告者
長崎大学 Sips いまこプロジェクト第1弾 「東日本大震災～長崎から出来ることを知り、動く！～」	平成23年 6月5日	長崎大学中部講堂	大学生 一般市民	森藤・河村 黒田
平成23年度 長崎大学医学部保健学科 オープンキャンパス	平成23年 7月16日	長崎大学医学部保健学科	高校生	森藤・河村 黒田
長崎大学 医学部保健学科教員FD	平成23年 7月21日	長崎大学医学部保健学科	保健学専攻 教員	川崎

## 活動報告

### 謝辞

本調査に参加するにあたり、職務調整および日程調整等に応じ、学期進行中であつたにもかかわらず快く送り出して下さつた松坂学科長はじめ、保健学科教員に感謝いたします。

### 文献

- 1) 村嶋幸代, 鈴木るり子, 岡本玲子: 大槌町保健師による全戸家庭訪問と被災地復興 東日本大震災後の健康調査から見えてきたこと, 明石書店, 東京, 2012年, 41-52.
- 2) 岡本玲子(代表者): 保健師による東日本大震災復興支援プロジェクト. 平成23年度厚生労働省老人保健事業推進費等補助金(老人保健健康増進事業分)「地震による津波で被災した一人暮らし高齢者・高齢者世帯の生活再構築のための支援過程の構造化」事業報告書, 2012年3月.
- 3) 山本保博: トリアージその意義と実際, 荘道社, 東京, 1999.

Volunteer activities by public health nurses in Otsuchi-city,  
Iwate, after the Great East Japan Earthquake.

Ryoko KAWASAKI<sup>1</sup>, Yasuko KAWAMURA<sup>1</sup>, Hiromi KURODA<sup>1</sup>, Kanako MORIFUJI<sup>1</sup>

1 Unit of Nursing, Nagasaki University Graduate School of Biomedical Sciences

Received 30 October 2012

Accepted 8 January 2013